

令和3年度 学校評価自己評価表(最終)

学校教育目標	学校教育目標 自ら学び、考え、行動ができる「きさ」の子どもの育成
重点目標	心と志(自立と貢献)を育てる学校

学校関係者評価委員(評価)
 A: 100≦(目標達成) B: 80≦(ほぼ達成) < 100
 C: 60≦(もう少し) < 80 D: (できていない) < 60

評価計画			自己評価				学校関係者評価委員				
経営目標		評価指標	具体的な取組・方策	12月			分析(成果と課題)	改善方策	評価	記述(成果・課題)	
中期	短期			達成値	達成度	評価					
生きる力の育成	確かな学力を育成する	学習規律を定着させる。主体的・深い学びの充実を図る。	・「ベル着」「次の学習準備をする」「号令前後の静止」の徹底を図る。 ・課題意識を明らかにし、自分の考えを持ち、それぞれの友達や思いと自分の考えとの相違点を考える主体的・深い学びの充実を図る。	90%	100	A	○ベル着・次の学習準備をする・号令前後の静止については、指導者による声かけや児童同士の声かけを継続していくことで意識して行えるようになった。次の授業の準備ができないう児童の固定化、休憩後のベル着に課題が見られる。 ○見直しを立てた後に、自力解決の時間をとることで、自分の考えを持つ児童が増えた。グループ内での全員発表や、ICTを活用した意見交流で、友達の見解を取り入れて発言しようとする児童が増えた。友達の見解を聞いて自分の意見を言うなど児童同士で考えを深め合う学びになっていないことが課題。	・今後も、こまめに評価(特に肯定的評価)や振り返りを行うこと、児童同士の声かけの評価をすること、また、重点的に取り組む期間を設定して取り組むことを継続していく。 ・課題に対して児童が主体的に学習に取り組める授業づくりを引続き行う。ペアやグループ、全体の場と話す機会を設定したり、ICTを活用し自分の考えを持たせたりするとともに、児童同士で考えを深め合える場の設定をしていく。	A	・考えを持たせ発表までできていても、子ども同士が考えを深め合うことは難しい。教員の指示でなく、具体的な手立てと指導が必要であろうと思う。 ・授業を参観し、学習規律を確保しながら児童同士の学び合いや個別最適な学びに取り組んでいる様子を見ることができた。 ・自分の考えを伝えることについては、グループ内での発表やICTを活用しての意見交換など表現方法に工夫が見られた。 ・ベル着の課題はあるが、達成できている。 ・ペアやグループでの学習を取り入れ、意見を発表しやすい環境を作っている。今後もICTを活用した意見交流に期待したい。 ・ICTの活用を先生全員で検討してほしい。	
		学力を確実に定着させる。	・各教科の特性を生かした指導を工夫改善し、全ての児童の「わかる・できる」を保障する。 ・ノート指導に取り組む、基礎学力の定着を図る。 ・ドリルタイムやランチタイムスタディを機能的に活用し、基礎的な技能の習得や復習を図る。	89%	105	A	○ドリルタイムの活用や、授業での定着時間の確保、ランチタイムスタディなどで繰り返し学習を行い、基本的な学力をつけることができた。学力差が大きい。思考力を必要とする課題の解決が難しいという課題が見られる。	・わかりやすい授業づくり、ドリルタイム、ランチタイムスタディの活用を継続し、更なる基礎学力の定着を図る。個に応じて必要な手立てを工夫する。ICTの活用を積極的に行う。	A	・基礎学力の定着では、繰り返し学習の徹底が大切で、よくされていると思う。それを活用して思考力の育成をしてほしい。 ・ドリルタイムやランチタイムスタディなど基礎基本の定着のために指導の工夫を行っている。 ・今後は思考力を高める工夫改善を行ってほしい。 ・来年度は、ICT活用2年目である。今年度の課題を整理し、効果的な活用について研究を続けてほしい。 ・三次学力到達度検査で全国平均を上回った教科が80%達成できている。 ・自主学習の大事さをPTAにも協力してもらう。	
		自学力を育成する。(小中一貫教育)	・考えの根拠を明確にしなが、全ての児童の「わかる・できる」を保障する。 ・家庭学習で予習や復習などの自主学習に取り組ませる。	91.0%	113	A	○個に応じた自主学習の内容を提示することで意欲的に取り組む児童が増えた。学級内で自主学習ノートの交流をしたり、モデルとなるノートを掲示したりすることを通して、自学の内容が充実したものになってきた。課題としては、自学の内容がきまってきた児童がいることや、自主学習にかかる時間に個人差が見られることが挙げられる。	・自主学習の目的や取り組み方を学級全体で確認しながら進めていく。定期的に自主学習の交流をしていく。引き続き、個の力に応じて取り組める工夫をしていく。	A	・自主学習は内容に重きをおくのか、それとも家庭学習の習慣化として時間に重きをおくのか、悩みどころである。 ・学ぶことは楽しいと思うような児童を育成している結果だと考える。高学年になるにつれて個人の力の差が大きくなると思うが、職員で個の課題を共有しながら指導を進めてほしい。 ・自主学習が定着しているが、個人差が大きいのが課題。	
豊かで健やかな心身を育成する	自己有用感の向上と礼節と規範意識の定着(小中一貫教育)	自己有用感の向上と礼節と規範意識の定着(小中一貫教育)	・自分の良さに気づき、伸ばし合いとする意欲や友達の良さを認められる児童を育てると共に、認め合い、つながりを深める集団づくりに努める。 ・道徳学習プログラム「吉(よ)き舎(やど)りプログラム」を計画実施し、自分との関りで考えさせる。 ・あいさつレベル(低学年 大きな声で挨拶をする。中学年 相手に伝わるように挨拶をする。高学年 場に応じた挨拶をする)に応じた挨拶ができる児童を育成する。 ・道徳科などとの関連を生かして規範意識の向上を図る。 ・アンケートやi-checkを分析し、PDCAサイクルで取り組む。	91%	113	A	○教科等、学校行事との関連を生かした「吉き舎りプログラム」の実施により、道徳科での学びを生活に生かすことで、自己肯定感の向上及び友達を認められていると思う児童の肯定的評価が向上している。また、道徳科で学んだことを生活に生かし、自他の良さを認め合う活動をカードなどで、視覚化することで、自他の成長を自覚することができた。 ○規範意識、挨拶について、児童会活動での取組との関連や道徳科での学びを生かし、規則の大切さや規則の意義について考え、規範意識を高めたり、礼儀の意義について学び、挨拶に対する意識を高めることができた。	・今後も委員会活動の一環として継続して取り組み、他者評価や自己評価する時間を設定して、自己有用感をもたせていく。 ○小中一貫教育の生活目標として生活3か条に取組み、児童が主体的に取り組めるようにしていく。	A	・今後も道徳科の学びを生活や他の教科等へも広げていってほしい。 ・どの項目においても達成度が110を超えており、取組の成果が十分に伺える。「吉き舎りプログラム」が効果的に指導に生かされている成果だと考える。 ・引き続き「自己有用感を持つ」「あいさつができる」「規範意識をもつ」ことを目標に、児童の自己指導能力の育成や共感的な人間関係作りに取り組んでほしい。 ・挨拶できている児童が多いが、外部からの来客に自分から挨拶できている児童が少ないのではないかと。声だけの挨拶のほか、会釈をするなどしても良い。	
		体力を向上させる	・新体力テストの県平均等や昨年度の自己記録をもとに、自己目標を設定させる。 ・体育科を中心に体づくり運動に取り組む。 ・給食時間や各教科等の時間を活用して、食に関する指導を行うとともに、掲示やたより等を活用して、食に関する興味・関心を高める。	58%	82		B	○反復横跳びの2回目の記録を測定した結果、県平均かつ、全国平均を超える項目は、男子では6学年中5学年、女子は6学年中2学年だった。男子83%、女子33%だった。新型コロナウイルス感染症防止の中で、活動ができにくいことから、体力が低下している。前年度から比較すると、握力・上体起こしに課題がみられるため、次年度に取り組んでいく。 ○なわとび大会を開催することができなかったが、生活委員会を中心になわとび強化月間に取り組んだ。各学年の取組や成果が分かるように掲示することで、全校で意欲的に取り組むことができた。 ○食事を楽しみにし、好き嫌いせず食べようとする児童は92%であった。食事マナーについては強化週間として取り組み、自分のマナーに意識を向かせることができた。	○引き続き、低学年から体を動かす習慣をつけるために、天気のよい日は外で遊ぶように声をかけたり、児童会活動の中にレクを取り入れたりして、主体的に運動に親しむことを大切にしていこう。 ・児童会が意欲的に活動する場として、なわとびの取組は来年度からも続けていき、体力の向上を図る。 ○引き続き、各教科等の時間や掲示、たよりを活用して、食に関する指導をすすめる。また、給食の時間における指導がコロナ禍で実施しにくかったため、別の時間を設定するなどして指導の機会を設けていく。	B	・コロナ禍で体を動かす機会が減っている中で、多様な取組を工夫されてやっていると感じた。 ・評価指標を見直すことも必要かもしれませんが、コロナ禍でもできる工夫が改善方針に書かれているので、来年度の取組に期待する。 ・縄跳びやレクを取り入れ、主体的に運動に親しむ取組をしている。 ・体力低下は、コロナ禍における家庭での生活や遊び(ゲームやネット)と関係しているか。 ・体力増強の指導を行い、繰り返し練習をする。
		づく頼りさをれる行う学校	・「きさ」小中一貫教育推進協議会の計画のもとに、小中9か年を見通しためざす子ども像に向け、連携教育の実施、充実を図る。 ・学校だより、ホームページで小中連携教育の取組を具体的に分かりやすい内容で保護者、地域に情報提供を行う。保護者アンケートを実施し、小中連携教育に関わる保護者等の理解を把握し、取組に生かす	90%	100		A	○学校だよりや学校ホームページ等を通して、保護者や地域に小中一貫教育の取組状況について情報発信することができ、保護者の理解を図ることができた。 ○今年度は、2年ぶりに「きさ教育の日」を開催することができ、保護者にもリモート配信で視聴していただくことができた。本校のみならず、保育所から高等学校までの取組を知っていただく機会となり、一層理解を深めることができた。	○情報発信をさらに充実されるとともに、学区内の連携をさらに深めていく。	A	・職員の共通理解のもと、保小中高が同じ方向で取り組んでいることは、大変意義深い。保護者、地域が加われば、より大きな成果も期待できる。 ・吉舎町にある高等学校としても「きさ教育の日」等、保小中との連携をさらに深めていく所存である。 ・コミュニティスクールの実施を意識した保御者、地域との連携、協働を進める。 ・今年度は「きさ教育の日」の開催をすることができた。 ・今後もリモート配信は行っても良いと思った。(家庭内での介護など事情の方もいるので)
働き方改革	教職員児童の向き合う時間の割合を増やす。	・働き方改革により、児童に向き合う時間の割合が増えた実感を感じる教職員の割合を80%以上(昨年度82%)にする。	82%	103	A	○教務事務支援員や介助指導員・学校支援員等の人的配置が働き方改革や児童に向き合う時間の確保に大きくつながっている。 ○日課表や行事の見直し、業務のデジタル化やリモートによる研修も大きな効果があった。	○日課表や行事の見直しをさらに進めるとともに、一人一人の業務の効率化やタイムマネジメントに関する研修や協議をする。	A	・校務分掌の見直しや職員の意識改革などでもできることから取り組んでいる。教職員の元気が、子どもたちの笑顔につながると思うので、継続して取り組んでほしい。 ・昨年度から評価指標を50%以上から80%以上に上げて取り組まれた成果だと考える。 ・児童と向き合う時間の確保が増えたことが他の目標の達成に対してもかなりの影響を与えている。 ・支援員等の配置のより児童と向き合う時間が確保されている。		

(評価) A: 100≦(目標達成) B: 80≦(ほぼ達成) < 100 C: 60≦(もう少し) < 80 D: (できていない) < 60